

王の劍士 一・五 「豊穣の丘」

雅

目を開くと、よく晴れた青い空が見えた。

空は視界を覗き込むように高く伸びた樹々の上に広がり、白い雲を薄く棚引かせている。

雲の足は速い。上空は風が強かったからなあ、と心の中で呟き、それで漸く自分の状況に疑問を持った。

「……何でこんなところで寝っ転がってんだ……？」

この視点だとうやうや、柔らかな草地の上に仰向けに寝ているらしい。天気はいいし暖かいし昼寝は好きだからそれ自体は悪くは無いが、何故こうしているのかが一瞬思い出せなかった。けして寝ぼけている訳ではない。

もう一度青く透明な空を見上げ、「ハヤテが喜ぶだろうな」と、あの空に良く似合う若い銀の飛竜を頭に描き――、レオアリスは今更ながら、自分が彼の背から落ちたのだという事を思い出した。

慌てて跳ね起きる。地面に打ちつけたらしい背中が鈍い痛みを訴えたが、それには構わず、草の上に片手を付いたまま辺りを見回した。

「ハヤテ！」

返る声はない。レオアリスは幾度か、空や周囲の樹々の間に目を向けて彼の乗騎を探したものの、どこにも飛竜の姿は見当たらなかった。

立ち上がり、漸く自分の体の状態を確かめるために、肩や腕、足を動かす。それほど上空を飛んでいなかった為か、怪我は全く負っていない。尤も大抵の場合、自分がそうそう怪我を負う事はないと良く知っていたから、自己点検を後回しにしたのだが。

レオアリスは回したついでなのか残念な気持ちが見られたのか、小さく肩を落とした。

「帰っちゃったかな」

見捨てて帰ったとは思っていないが、もし落ちたレオアリスを探して見つからなかった場合、飛竜は事態を知らせに戻るだろう。その位彼は頭がいい。

落ちた時は確かまだ昼前だった。ハヤテは少し冷えた爽やかな空気の中を、嬉しそうに駆け抜けていた。

そろそろ帰ろうと、レオアリスも飛竜の背中の上で伸びをした瞬間――落ちた。

レオアリスはそれを思い返して、青年というよりはまだ少年に近いその顔の上に悔しそうに朱を昇らせたが、彼の名誉の為に言えば、正確には、何かに弾かれたのだ。

固い衝撃と、ハヤテの銀翼が青い空で一回転したのを覚えている。

(弾かれた……ぶつかったのか？ ……何に？)

短い黒髪の頭を上空に振り向け、レオアリスは漆黒の瞳を細めた。

視界には遮るものは何も無かった。空を駆ける王者の、更に上位にある銀翼に敬意と惧れを表し、鳥達も道を譲る。ハヤテは本当に気持ち良さそうに、伸び伸びと、蒼天を駆けていたのだ。

それにレオアリスの目も、さすがに節穴という訳ではない。それなりに、状況を的確に見極める事が出来るつもりだし、それが出来なければ今の立場は務まらない。

「……てゆーか、帰ったら絶対最悪だよなあー。うっかり落っこちました、とか言ったら何言われるか判らねエ」

グランスレイは渋い顔を更に渋くして、「だから一人で出かけるべきではない」と懇々と諭すだろうし、ロットバルトはあの顔に見ただけ穏やかな笑みを浮かべて「迂闊」と断じるだろう。想像が付き過ぎて、レオアリスは今から溜息を付いた。他の三人は笑って済みそうな気もするが、それよりももしかしたら、ハヤテで遠出する事も今後止められるかもしれない。

しかし、そんな事より今はもっと重要な事があった。

飛竜の気にまかせて飛び過ぎた。飛竜は徒歩で月かかかる距離でも、僅か三刻程で駆け抜ける。そして、銀翼は飛竜族の中でも上位の、迅い翼を持っていた。確か一刻は飛んでいた筈だから……。

軽い眩暈を覚え、レオアリスは額に右手を当てて、頭を抱え込むようにして草の上にしゃがみ込んだ。

「ここはどこで、俺、下手するとこっから歩いて帰るのか……?」

溜息と共に空を仰いでみたものの、依然ハヤテの姿は見当たらない。暫く待ってれば迎えも来るだろうが、ここでずっと待っていて、やって来た迎えの——例えばクライフならば笑って済ませられるが、他の面子が来た場合、ここに座ってにこやかに手を振って見せるといいうのも、少々気が引けた。いっそ怪我でも負って身動きが取れないくらいの方が、格好が付いたかもしれない。

(それも情けねえか……)

まあレオアリスは元来あまり後ろ向きではない性格だ。ここでもただ待っていても仕方ないし自分で帰る努力をしないというのも戴けないと、そう結論付けると、少し努力をしてみる事にした。

「カイ」

呼ばれると、どこからとも無く小さな鳥の鳴き声が響き、すぐに中空に、鳥に似た黒く長い尾の鳥が姿を現す。レオアリスの伸ばした腕に降りると、再び高く鳴いた。

常にレオアリスの傍に従う使い魔だ。艶やかな黒い羽毛に包まれた喉元を指で撫ぜ、金色の眼を覗き込む。

「お前ちよつと、ここがどこか見てきてくれるか。んで、グランズレイ達に伝言頼む」

カイは翼を羽ばたかせて了承の意を示すと、姿を消した。一瞬後には上空高く舞い上がり、辺りを数度旋回する。

僅かの間もなく再びレオアリスの腕に降り、カイは二、三度、レオアリスにしか汲み取れない言葉を発した。たちまち、レオアリスの顔がげんなりと曇る。

「マジ……?」

カイが告げたのは、現在地がヤンサル地方の丘陵地帯であり、すぐ近くに主要な街道は見当たらない、という事だった。ヤンサルといえ、王都から百六十里ほど離れた西方にあり、整備された西の街道を使っても馬で五日程かかる所だ。

なだらかな丘が幾つも連なるそこは、緑豊かな絨毯が敷かれたようで

見た目には美しい景観だが、小さな村が点在するばかりで交通の便は悪い。すぐに街道に出られれば乗り合いの馬車でも捕まえられるか、街に出られさえすれば馬や飛竜を貸す厩舎もあるだろうが、どうもそう都合良くは行かないようだった。

「しょうがねえ、待つか」

適当に動きすぎて迎えずれ違っても、また言い訳が面倒くさい。レオアリスはカイの頭を一つ撫でると、弾みをつける様に上空へ放した。

カイは心得たとばかりに一つ鳴き、たちまち空中に溶ける様に姿を消した。数瞬後には王都に着いて、レオアリスの言葉を伝えるだろう。ちよつと昼寝でもしていればその間に迎えも来ると、レオアリスは改めて柔らかい草の上に寝転がった。

仰向けに両足を投げ出し目を閉じると、陽射しが薄く瞼の裏に感じられ、状況さえ脇に除けてみれば、かなり心地良い。これは案外得だと、グランズレイが聞けば目を剥きそうな事を暢気に考えながら、頭の後ろに腕を組んだ。

それにしても、とふと思う。

一体自分は「何」に弾かれたのだろうか?

「クライフ中将、上將をお見かけしませんでしたか」

爽やかな日差しの中、注ぐ回廊で涼やかな声に呼び止められ、第一大隊中軍中将クライフは、爽やかな気分が一気に褪めた。乳白色の円柱を連ねた回廊を彼の方に歩み寄ってくるのは、すらりとした長身の、金の髪の毛、蒼い瞳の、むかつくぐらい顔の整った男で、クライフの前に立ち止まると、こいつにしか似合わないだろうという程の卒のない笑みを口元に浮かべた。黒地の軍服に包んだ身のこなしも卒がない。

第一大隊の一等参謀官である、ロットバルトだ。

聞かれたくない相手に、聞かれたくない事を聞かれたもんだと、クライフは内心溜息をついた——つもりだが、どうやら顔にすっかり出ていたようだ。ロットバルトは不審なものを感じたのか、蒼い瞳を冷ややかに

に細め、クライフに据えた。

「……どちらに？」

「ああ、いや、まあ、すぐ帰ってくるって。心配すんな」

努めて明るく言ったものの、ロットバルトはあっさりと肩を竦めた。

低く響きの良い声には、取り繕う事も無い呆れた色がある。

「今の言葉で何が判るんです。……アスタロト公とご一緒ですか。それとも飛竜で？」

「——飛竜です」

自分より後に中将に——彼の場合一等参謀官という職位だが、とにかくクライフより後にその地位に就いたくせにこの不遜な態度はどうかと思うが、取り敢えずクライフは不必要につつかないよう、できる限り簡素に素直に答えた。

レオアリスがクライフに告げて彼の飛竜で出てから、もう二刻は経っている。それが朝の会議後で、今はそろそろ正午になろうというところだ。ただのいつもの散策だし、程なく戻ってくるだろうから、そう問題はない。

クライフとしては少し恐々としていたのだが、ロットバルトもそう考えたのだろう、普段は容赦のないこの参謀官も特に苦言も言わず頷いただけだ。

「仕方ありませんね。お戻りになってからでも私の用は足りる。ただ副将が探しておられたので、上將がお戻りになったら、まずは執務室において頂くよう伝えてください」

ロットバルトの用はいつもの通り、午後の演習の布陣についてだろう。彼の手にしている書類の束に眼を留め、午後の演習を思っ少々うんざりとしながらも、クライフは明るく軽く、颯爽と片手を上げた。

「りょーかい了解。んじゃな」

そう言っ歩き出そうとした時、上空に飛竜の羽ばたきが響いた。

「お、言ってる間に戻ったんじゃないか？」

少しほっとしながら、クライフは短く刈り上げた明るい茶色の頭を、回廊の丸みを帯びた天井の下からひよいと出して、空を振り仰いだ。思っ

たとおり、二人のいる士官棟の中庭の上を、銀翼の飛竜が旋回しながら降りてくるところだった。ロットバルトも整った顔の上に呆れたような、だが僅かに温かみを覗かせた笑みを小さく浮かべ、中庭に身体を向ける。二人は左腕を胸に当て、その場に片膝を付きかけて——同時に動きを止めた。

飛竜の背は、空だ。乗っているべき主の姿が見当たらない。

飛竜は一声、高く鳴いた。

「……ハヤテ！ 上將はどうした！」

見るからに興奮した様子の飛竜へクライフが駆け寄り、ロットバルトも厳しく眉を顰めて中庭に降り立つ。

飛竜は今にも再び飛び立とうとするかのように翼を震わせ、それから二、三度鋭い声を上げると、また翼を広げた。

「……飛竜の用意をさせましょう」

緊張の面差しのまま、ロットバルトが回廊へ踵を返しかけた時、今度は鳥の鳴き声が響いた。羽根を舞い落としながら、見覚えのある漆黒の鳥が姿を現す。

二人の中間点に降り立ち、パカリとその黒い嘴を開くと、彼等の年若い上官の声がふわりと流れた。

『……悪い、ちよつと落っこちた。ヤンサー丘陵の、真ん中あたりかな。移動手段が徒歩しかねえ。カイに案内させるから、適当に迎えよろしく』

少し気まずそうな、だが明るいその響きに、クライフはハヤテの長い首に手を置いたまま、ロットバルトは回廊の石畳に片足をかけたまま、束の間固まった。

「……は、はは……。落っこちたって」

「——迂闊な……」

一つの世界が存在する。

広大な世界は複数の国家に分かれ、絶えず大小の紛争がどこかで発生

している、そんな世界だ。

未だ開拓されず手付かずの豊かな自然が世界を満たし恵みを与える一方で、その過酷さからも無縁ではいられない。

人の世のような科学技術の発達は無いが、自然界に満ちる力を活用、流用する術を知っていた。『法術』と呼ばれるそれらは、日常の生活に根ざすものから戦闘に利用される破壊的な力まで様々にあるが、基本的は学問や才能により得られ、全ての者が自由に使えるものではない。一般的に多くの者は、自らの足で歩き、手で作り、身体と力を行使して生活していた。

この世界には発達した言語能力と生産能力、そして形成される社会という意味においても、人間だけではなく多種多様な種族が存在する。人と同様の姿を持つ種から半獣族、半鳥族、水棲族、多種多様な種があるいは種族ごとに村を形成し、あるいは主要な街に混在していた。

寿命は種族により異なり、僅かに数年しか寿命を持たない種もあれば、中には永遠に近い時を過ごす種もある。

太陽は東から昇り、西へと落ちる。

夜を追うように朝は訪れ、そしてまた夜を迎える。

地を耕し作物を作り、石を削り組み上げ街を形成する。

食事をし、眠りにつき、笑い、泣き、怒り、嘆き、苦しみ、喜びを得ながら日々を生きる。

世界には、連綿と続く生きとし生けるもの達の営みがある。

大陸の西部に位置する王国アレウス・エクゼシリウムの王都であり、この国は大陸で最も広大で富裕な国土を有している。

現王の在位は長く、既に三百年に渡り安定した政まつりごとを続けてきた。その賢政により民から英君と慕われ尊敬の念も厚いが何より――、民の中に、そして王に近く仕える者になるほど、王に対する畏怖が強くあった。

それは王の有する力によるものだ。長い統治を可能としてきたそれ。この世界には法術と呼ばれる自然界の力を用いる術があるが、王の持

つ力は法術とも次元を異にしていた。

王の版図を北から南に旅しようとした場合、整備された街道を行ったとしても馬で五ヵ月、ほぼ半年を要する。

東に峻険ミストラ山脈、西に古の海バルバドス、南に灼熱の砂漠アルケサス、北に黒森ヴィジャが行く者の足を阻み、そこから先は数多くの小国が乱立し生まれては消える、争乱に満ちた土地が広がる。王国の四方を取り巻く生者を寄せ付けぬ酷地は、逆にそれら小国の侵入を阻む絶好の墨壁でもあり、それが王国が長期の安定を保っている大きな要因でもあった。

ただ四方の辺境のうち、古の海バルバドスには、王と同等の時を生き続ける海皇と呼ばれる存在が深淵の世界を治め、領土内ではありながら王国とは一線を画していた。

およそ四百年前、バルバドスとの間に大きな戦乱があり、百年もの長きに渡り、西方の辺境部は激しい戦乱に覆われた。双方共に多数の死者を出した戦乱は、三百年前に両国間に不可侵条約が結ばれる事で漸く決着を見、以来大きな戦乱はなく、時折小規模な争いが発生する他は国内は安寧を保っている。

国内は王の統治のもと、四大公と呼ばれる四つの公爵家、十の侯爵家、及び九十九家の諸侯がそれぞれの領地を治めている。

国の政務を司るのは、大別して四つの機関に分かれる。

内政を司る内政官房、長は四大公の一角、北方公ベール。

治水、土地、生活を司る地政院、長は東方公ベルゼバブ。

財務、商工業を司る財務院、長は西方公ルシファア。

治安、軍務を司る軍部、正規軍の長に南方公アスタロト。

内政官房は他の三部門を総括、調整する役割も果たしている。

また正規軍とは別に、王と王城を守護する王直属の軍である、近衛師団があった。

近衛師団は王を守護する王直轄の部隊であり、総将アヴァロンの元、総数は約四五百名、それぞれ一五百名毎の三つの大隊に分けられる。

第一大隊から第三大隊までの各大隊は大将が率い、その中で更に三つの中隊、左中右軍に分かれ、中隊の下に一隊五十名の十の小隊が存在した。

王城の守護以外にも、王の勅命が下れば、要人警護、突発的な紛争、様々な件に対応する。

正規軍と師団との関係は、国土の保守平定と王の守護、どちらが上位という訳でもない。

だが組織の違いは意識の違いであり、多少の反目感情が存在しているのもまた事実だった。

一等参謀官ロットバルトは飛竜の鞍を整えながら、軽く溜息をついた。広い厩舎の隣では、中軍中将クライフが楽しそうな鼻歌交じりで、自分の飛竜の準備に余念が無い。

副将であるグランズレイはレオアリスの迎えを二人に命じた。平時であれば一人で何ら問題はないと反論するところだが、数日前、ヤンサールでは西方三軍に動きがあったと聞いている。特に関連も影響も無かったため、レオアリスに報告をしなかったが、あの時一言告げておくべきだったかと、ロットバルトは僅かな後悔の念を抱いた。

(余計な事に、首を突っ込まないといいが)
上官の行動を不遜な表現で評し、ロットバルトは騎乗の準備の手を早めた。

再び眼を開けた。

風に騒めく樹々の音に紛れるように、レオアリスが寝転がっている緩やかな斜面の右手から、小さな幾つもの足音が近づいてくる。小さな声も。

今いる狭い草地を囲む、木立のすぐ向うで足音は止まった。

樹の陰から自分を恐る恐る覗き込む姿を視界の隅に捉え、レオアリスは敢えて眼を閉じ、眠っている振りをしてみせる。敵意はなく、覗いている姿が皆まだ子供だったからだ。ひそひそと、だが賑やかしく幼い声が耳に届く。

「誰か行きなよ」

「誰って、誰が？」

「寝てるじゃん、見に行くだけなら恐くないよ」

「ちよつと寄って、ぱつと戻っておいでよ」

「だから誰が？」

「でもあれ、落っこちたひとかなあ」

「うーん」

しきりに囁き交しながら、一向に近寄ってくる気配はない。次第にレオアリスは、寝ている振りをするのが面倒臭くなってきた。何人いるのだろう。子供ばかり十人近いか。

「おぼばが言ってたもん。ここにいてるって」

「おぼばがちゃんと落としたって言ってたし」

その言葉に、レオアリスは堪らず飛び起きた。

「てめえらっ！」

草地を蹴り、木々の間に降り立つと、手近な子供の襟首をひっ捕まえる。

「きゃああっ」

隠れていた子供達が、一斉に辺りに散った。

「何考えてんだコラ！ 普通あの高さから落ちたら死ぬぞ！」

「ぎゃあああ！」

「ぎゃあああ！」

残りの子供達は二、三本離れた木の陰に身を寄せ合い、恐々とレオアリスと襟首を掴まれた少年を覗き込んでいる。少し大人気ないと思いつつ、レオアリスは掴んだ手を緩めた。少年がぱつと身を翻し、仲間達の中に駆け込む。

一、二、三……と人数を数えてみれば、四、五歳位から十一、二歳位まで、男女合わせて九人もいる。

「お前等……」

口を開いた途端、彼等はびくりともう一本分、樹々の間を後退った。レオアリスは害意のない証拠に、両手を開き、何も武器などを持っていない事を示す。

実際、黒の上下に包まれた細身の身体には、丈の長いその上衣の下にも、短剣一本身に付けてはいない。

「怒ってねえからさ。何の用だか……」

「何だあ、子供じゃん！」

「大人じゃないじゃん！」

「あんなんじゃダメだよ、おばばのばか」

「……ああ？」

子供達のいかにも失望した声に、びくりとレオアリスの眉が上がる。

「おいコラ誰がガキだ。俺はもう十六だ。大体言つとくけど、お前等よりずっと年上だぜ。」

しかし子供達は聞く様子もなく、興味を失ったようにレオアリスに背を向けて、来た道に戻りはじめた。何故か、用がある訳ではないレオアリスが、慌てて彼等呼び止める。

方法は判らないが、どうやらレオアリスを狙って「落とす」というのだ、正直これで放っておかれては身も蓋もない。

「ちよつと……待って。ほら、何か訳があつて俺を、えーつと、落とすんだろ？」

彼等の前に回りこんで身を屈め、子供達の目線に合わせて顔を覗き込

む。だが返ってきたのは無情な返事だ。

「兄ちゃんじゃ役に立たなさそうだもん！」

「はあ！？」

いきなりきっぱり断じられたが、さすがにここ最近、役に立たないなどと言われた記憶はない。

「あいつらをやつつけるのに、兄ちゃんじゃ無理だもん」

「武器も持ってないなんて、がっかりだよな」

「ねー」

「おばばは間違えたんだ」

「すつごい強いひとだつて言つてたのにね」

「ねー」

口々に顔を見合わせて頷き交す子供達を眺めながら、レオアリスは考え込むように口元に手を当てた。どうやらこの子供達は、何らかの手助けを必要としているようだ。今まで寝転がっていた草地にちらりと視線を向ける。

迎えはあとどれくらいで来るだろう。王都からここまでではハヤテの翼でも一刻はかかる距離だ。少し状況を聞いてみる位の時間はありそうだった。

軽く頷くと、レオアリスはに、と笑つてみせた。

「お前等のおばばは正しい。俺は結構役に立つぜ？ ま、どうするかは話を聞いてからだけど、取り敢えずそのおばばとやらの所に連れてけよ」

子供達はレオアリスの言葉に再び顔を見合わせ、遠慮の無い疑り深そうな視線を向けると、口々に声を揃えた。

「嘘だあ」

（——こんの……、くそガキ共……！）

レオアリスは思わず両手を握り込み、それからやり場のないまま力なく肩を落とした。

しょうがないから付いてくれば？ などと言われては、さすがにそこま

での義理はないのだが、レオアリスは子供達の後について歩きだした。どうしても気になったからだ。

例えばハヤテの行く先に何らかの術が施されていた場合、その気配に気付かない程ハヤテは鈍感ではない。レオアリスにすれば尚更だ。術はある程度嘯った。いくら気を抜いていたとはいえ、自分を叩き落とすような荒っぽい力が働けば、気付かない事は無いだろう。

それとこの相手は、どうやらレオアリスに用があるらしい。

そのくせ、とレオアリスは上空をちらりと見上げた。

あんな所から叩き落として、死んだらどうするつもりだったというのか。用があるのにそれは粗過ぎる。

だから多分、死なないと想定していたのだ。この子供達の会話からも推測できるように、相手——レオアリスが大体どんな存在か、予想が付いていたのではないか。

面白いから会ってみよう、と、そう思った。

穏やかな線を描く斜面を子供達の後についてしばらく下り、再び昇りに差し掛かったくらいで、前方の丘の上に一本の高い木が見えてきた。

子供達の足が駆け出しそうに速くなる。一番後ろにいた年長の少年が振り返ってレオアリスを見上げた。

「兄ちゃん、おばばに会って満足したら帰るんだぞ」

(ムカつく……)

いや、こんな所で子供相手にムキになってはいけない。何と言っても自分の方がずっと年上なのだと、レオアリスはひきつった笑いを抑え、そっと深呼吸した。ふと、自分を見上げている少年の表情に目を留める。

(ん?)

「危ないんだから」

生意気な口調だが、実はその奥に心配そうな響きが隠れている事に、レオアリスは気が付いた。

「——何だ、心配してんのか？」

からかうようにそう言うと、気の強そうな頬をちよつと赤くして、少

年はそっぽを向いた。

「べつに——っ！兄ちゃんが死んでも知らないけど、死体片付けんのが嫌なだけだ」

レオアリスは黙って少年の顔を眺めた。死ぬとか死体とか、この子供達が口にするには物騒過ぎる言葉だ。

周りを見渡せば、子供達は一樣に不安そうな顔をレオアリスに向けている。レオアリスは殊更に笑ってみせた。

「心配すんな。ほら、普通、あの樹よりも高いところから落ちたら死ぬだろ？」

レオアリスが指差した樹は、丘の上に生える、五層の塔程もあるものだ。周囲の樹々から一際高く抜け出し、太い幹から大きく傘のように枝葉を広げている。

子供達はその高さを想像したのか、怖そうに首を竦めてうんうんと頷いた。

「でも俺、生きてるし」

レオアリスとしては安心させようとして言ったのだが、小さい子供達の数人は、途端に顔を歪め声を上げて泣き出した。

「うあ」

突然の事にどうしていいか判らず、レオアリスが狼狽していたその時、どこからかしわがれた声がかかった。

「——おやおや、何を泣いているのだえ」

子供達が喜色を満面に浮かべ、声のした方に走りだす。丘の上に、密集した樹々が折り重なるように枝葉を開き、壁を作っていた。樹々の中ほどに、先程レオアリスが指差した樹が、ひとときわ高く天へと伸びている。

まだ狼狽えたままのレオアリスの前で、壁のように密集していた茂みが、ゆつくりと真ん中から割れ始めた。そこから、どれほど歳経ているかも判らない程の老婆が、丸めた背中を支えるように、細くすべらかな木を杖にして歩み出た。

足が悪いのか、右足を重そうに引きずりながら近寄ると、子供達の前

で立ち止まり、幼い子供達が自分に抱きつくように纏わり付くのを、老婆は穏やかな笑みを浮かべて見回した。

「客人を前に、泣いては笑われるよ」

「おばばが悪いんだー!」

「お兄ちゃんあんな所から落ちたって」

「痛いよおー!」

余計心配させたのかと、レオアリスは反省交じりに右手で短い黒髪をくしゃくしゃと交ぜた。老婆は空気を擦るような笑い声を上げ、両手で子供達の頭を撫でながら、皺に埋もれた眼をレオアリスに向けた。落ち窪んだ瞳に浮かぶ色は、黒にも青にも変わる。始めて見る、そしてまたどこかで見たようなそんな色だと、頭の片隅で思った。老婆の口元が柔らかい皺を刻む。

「随分手荒にお呼びして、ご迷惑でしたらう」

「ああ、いや……」

何と返すべきか言葉を探している内に、年長の少年が老婆に近寄ると、その顔を見上げた。

「おばば、この兄ちゃんじゃ無理だよ。間違っただらう？」

「間違っただらぬよ」

「だって、武器もなんも持っていないぞ! すぐ殺されちゃう」

「大丈夫じゃよ。……彼はちやあんと剣を持っておるで」

レオアリスの肩がぴくりと反応する。すっと細められた漆黒の瞳を眺め、老婆は小さく笑った。

「どうぞ中に……。どうか、この子らの助けになっていただきたい」

そう言うと、子供達を手招き、口を開けた茂みの中へと歩いていく。

一瞬だけ迷い、レオアリスは茂みの奥に足を踏み入れた。

外からは単なる茂みにしか見えないものだったが、内部は驚く程広がりがあった。それは住居として造られているようで、壁や天井には青々とした葉が生い茂り、老婆が歩きたびにさわさわと揺れる。ところどころ

る葉の層が薄くなっている箇所からは、陽の光が注いで室内を柔らかい光で満たしていた。

卓も椅子も棚も、床や壁から生え出すようにしつらえられ、何もかも葉と枝で造られている。部屋の中央には、先程の大樹のものだろう、大人二人が腕を伸ばしても抱えきれない程の樹の幹が、床から蔦の這う天井に抜けるように生えていた。節くれだった表皮から、かなり年経た樹なのだと判る。

「すごいな」

どんなふうにも創られたのだろう。レオアリスは幼い頃祖父達のもっと少しばかり術を学んでいたが、こうした植物を媒介とした術を目の当たりにするのは初めてだった。レオアリスが感心して室内を見渡している時、子供達が得意そうな顔で彼を見上げる。

「すごいだろ」

「おばばが造ったんだ」

「おばばが杖で触るとできるの」

そう言いながら何が気に入ったのか、レオアリスの足元にまとわり付いてくる。歩きにくい事この上ないが、いつも年上にはばかり困まれているレオアリスとしては新鮮で、早くも「こいつらも結構かわいいもんだ」などと考えていた。

「痛かった？」

「ごめんね」

「おばばを怒らないでね」

一生懸命に見上げてくる子供達の顔に、レオアリスは堪え切れず吹き出した。さっきまでは役立たずとか言っていたけれど、この変わりようはどうだろう。一番小生意気そうな少年でさえ、既に態度が違う。

レオアリスが老婆の目的の相手だと分かったからのようだ。相当「おばば」を信頼している、というか、とにかく好きなのだろう。

「大して痛くなかったし、怒ってないって」

この子等と「おばば」はどういう関わりなのだろうと、前を歩く老婆に視線を向けた。祖母と孫、というようにも見えない。子供達も似通っ

てはいるが、兄弟という訳では無さそうだな。

正体の見えない相手ではあるが、そこに対しての不安は無い。相手がどんな者だろうと、切り裂く自信がレオアリスにはある。

(ま、そういう相手でも無さそうだな)

彼の参謀官であるロットバルトなどがそれを聞いたら、相手の情報もろくに得ずに断じる事に呆れ、かつ耳の痛い苦言を呈するだろうが、レオアリスはどちらかという理論より直感を重んじる方だ。

それに――。自分の中にふわりと温かいものが広がるのを感じて、レオアリスは瞳を細めた。

幼い頃、自分もこうして祖父達に纏わりついていた。

取り敢えず、この老婆や子供達に害意や悪意は感じられない。

自分の事をどこまで知っているのか、それは気に掛かるところだが――。

とくんと一つ、体内で別の鼓動が鳴る。

「お呼びしたのは傷つける為ではない。ここで剣を抜かないでくれ」

ふいに老婆が口を開き、レオアリスは立ち止まったままその顔を見下ろして、笑った。自分が何者なのか、それはこの老婆には見えているらしい。その自分に用があると言う。

「そうは思っていない。けど、疑問はいくつかあるな」

「何から解決しようかの」

それに答えるように笑みを浮かべ、老婆は右手を延べてレオアリスに葉の茂った椅子を示した。素直に腰掛けて、それが予想に反して柔らかい絹のように身体を受け止めるのに驚きを覚えながら、卓を挟んだ老婆に視線を向けた。

「……まず、どうやって落としたのか。あんなふうに落つことされたのは初めてだぜ」

レオアリスの閉口した口調に、老婆は空気を擦るような笑い声を立て、けれどもゆっくりと頭を下げた。周りに子供達が集まって座る。

「もっと丁寧にお呼びするつもりじゃったのだが、思いの外お前さんの飛竜が反応しての。悪い事をした」

「ごめんねー」

「ごめんねー」

「分かった分かった」

口々に声を上げる子供達を宥める為に片手を振りながら、レオアリスはなるほどと頷いた。

老婆の術に反応し、それを避けようとしてハヤテが急旋回したのだ。暢気に伸びなどしていたから、うっかり振り落とされたという訳だ。

(あー、迂闊……。術に気付かないのも迂闊……。じいちゃんにバレたら怒られんな)

立場に慢って術の勉強を怠るからだ、祖父の声が聞こえる気がする。

「飛竜も暫らくはお前さんを探しておったが、見つからぬよう目隠しをさせてもらった」

老婆の物言いたげな深い色の瞳は、レオアリスの反応を見定めようとするかのようだ。

「わしはこの通り足が悪くての。それでこの子等に迎えに行かせたという訳じゃ」

今はおとなしく座っている子供達の最初の様子を思い出し、レオアリスは苦笑した。

「何て言って寄越したんだ？ まったく信用されて無かったぜ」

「この子等を助けてくれる、強いお人じやとな」

レオアリスは小さく口元に笑みを刷く。

「――ばあさんは判ってんだな。……俺の、立場もか？」

老婆は頷いて立ち上がった。レオアリスと正面に向かい合い、静かに頭を下げる。

「子供等の窮状を救ってはくれぬか。――近衛師団の大将どの」

「何っでお前まで来るかなー」

クライフは傍らを飛空する黒燐の飛竜を、不満そうに眺めた。正確にはその背に騎乗しているロットバルトを、だったが、目が合った飛竜の

赤い瞳に「何か文句があるのか？」と問われた気がして、慌てて両手を振る。

「や、お前じゃなくなつて、上のヤツだよ」

「何を言ってるんだか……」

ロットバルトは自分に顔を向けた飛竜の首を軽く叩き、それから飛竜に言い訳をしているクライフに冷めた視線を向けた。クライフは一瞬ぐっと詰まったが、直ぐに気を取り直して睨み返す。そうしても険悪な雰囲気は生まれないのは、クライフの陰の無い性格ゆえだ。

「俺一人で十分だろ。副将も信用ねえよなあ」

自分が迎えに行くと言ったのに、グランズレイは、ロットバルトも共に行くように命じたのだ。一人だったら空の散歩は楽しいし、レオアリスはクライフと似て固い事は言わないし、ヤンサールはいい所だ。

(……楽しかったのに)

ロットバルトがクライフの内心を見越したように、口元だけで笑う。

「貴方と上將だから問題なんでしょう。第一私も、貴方一人に付いていく程暇ではない」

「ムツカツク……」

「ヤンサールは葡萄酒の産地ですからね。貴方がハメを外すのではないかと、副将はお考えなんですよ」

「……説明すんな！」

もの柔らかに性格が悪いから余計に質が悪い、とクライフはロットバルトに聞こえないよう、脇を向いてぶつぶつ呟いた。が、ちよつとくらいい、ヤンサールの葡萄酒をひっかけて来ようと目論んでいたのは事実なので、反論のしようもない。クライフは仕方なく溜息をついた。明るい茶色の瞳が天を仰ぐ。

「あゝあ」

「何です」

「何でもねえですよ」

「それは結構。無駄話をしているより、先を急ぎましょう。さすがに銀翼の速度に振り切られそうだ」

ハヤテは黒燐との速度の違いなどお構いなしに駆けていく。銀翼は軍の大將級が騎乗する飛竜であり、師団兵の乗騎である黒燐の飛竜とは、空を駆ける速度がまるで違った。時折焦れて急かすように旋回をしてみせるものの、彼等の速度に合わせるつもりはないようだった。ロットバルトはクライフの返事を待たずに、手綱を繰った。

「チツ。もつと目上を敬えってんだ」

ほんの二、三歳の差ではあるが、それでもクライフの方が年上には違いない。もつともレオアリスの方がロットバルトよりも更に三、四歳は年は若い。年齢が上だ下だと、その辺の議論はあまりする意味はなかった。それにクライフも本気で腹を立てている訳ではない。大体怒ってもすぐ忘れる、良く言えば小さい事には拘らない性格だ。

「酒は、上將にお願いしよう」

レオアリスがいいと言えませんが、ロットバルトも黙るしかないだろうと、そう呟いてクライフも飛竜の速度を早めた。

レオアリスが「落っこちて」からそろそろ二刻は経つ。

顔を上げれば、前方に青々と広がる丘陵地帯が、急速に近づいてくるのが見えた。

近衛師団、大將。

子供達はそれがどんなものなのか、さっぱり見当も付かないようで、老婆の下げた顔と表情を引き締めたレオアリスとを、交互に見つめていた。

レオアリスは暫く考え込むように黙っていたが、ややあつて口を開いた。

「——取り敢えず話を聞かせてくれ。でも、どうするかは聞くまで判らない。貴方も判っている通り、俺も立場上、そうやりたい放題は出来ないからさ」

老婆が呼んだ通り、レオアリスは近衛師団第一大隊を預かる立場にある。近衛師団は王を守護する為の部隊で、王の勅旨の下に動く。

従って、問題が大きければ大きい程、個人の意志のみで勝手な行動を取る事は出来ない、レオアリスの言っているのはそういう事だ。

老婆はそれを心得ているのか、小さく頷いて事の次第を話し始めた。

「この子等は、お判りの通りわしの孫ではなく、この近隣の村に住んでおる。ここらの村は、たいいてい葡萄を栽培しておつての。葡萄酒や砂糖煮などを作つて暮しておるな」

「ああ、そーいやあ……」

酒の弱いレオアリスはあまり興味がなくて今漸く思い出した位だが、ヤンサールは葡萄酒の産地で有名だ。ヤンサール種という葡萄酒に適した上質な葡萄が採れるが、収穫量は多くはなく、その分値も張り、王都でも扱う商人は少ない。クライフがたまに手に入れてきては大喜びしていたのを思い出す。

目をやれば、子供達は膝を抱えて座つたまま、とろとろと微睡み始めている。老婆は年経た顔にいつとき柔らかな皺を刻んだが、すぐに厳しい色を取り戻した瞳をレオアリスに向けた。

「……三日ばかり前、この子等の村が襲われた。この子等の言葉はただどしくて明確な事は判らぬが、どうやら西方軍に追われてこの丘陵に逃げ込んだ、野盗の一団らしいの」

西方軍はその名の通り、正規軍の中で西方域を管轄する軍だ。街道を荒らす野盗の討伐も、その任務の一つにある。

この辺りを管轄する西方軍第三大隊が、ここ最近被害が多発していた野盗討伐に動いたのは、数日前の事だった。野盗達の大方は兵によつて斬られ、或いは捕縛されたが、その内の十数名は包囲を逃れて落ちた。

夜陰に紛れて軍の追っ手を振り切つた野盗達は、丘陵にある小さな村を見つけ、そこを襲つた。

村は周囲を谷に囲まれた小高い位置にあり、村へ通じる道は一つしかない。野盗達はそこに身を潜め、軍の追撃をやり過ぐす事に決めた――。

レオアリスは老婆の話聞きながら、村で起きたであろう事に、眉を顰めた。

子供達は、運良く逃れてくる事が出来たのだろう。

だが、村人達は――。

「だいじようぶ。皆お酒の部屋にいるから」

幼い声に顔を向けると、子供達はいつの間にか目をしっかりと開いていて、レオアリスの顔を見つめている。

「無事なのか？お前等の両親とか、他の村人達も？」

「僕たち、頑張つたもんね」

「ねー」

「部屋は地面の下なの」

「扉は、ぐるぐる巻いてきたの」

「まだ切れてないよ」

「？」

何の事を言っているのか、さっぱり判らない。ただ、村人達は、おそらく……無事なのだろう。何故かは判らないが、子供達の言葉には、妙な説得力があつた。

レオアリスはその事に一旦の安堵を覚えながら、老婆に視線を戻した。「軍は？ここらは正規西方の第三大隊の管轄だろう。野盗を叩いたなら三隊が最後まで追うと思うけどな。知らせたのか？」

レオアリスの問いに老婆は首を振つた。

「村からの道を閉ざされていて、知らせようもない。この子等もわしも、街道までは行かれぬ」

足の悪い老人と幼い子供達では、確かにそれも仕方がない。

「それに、どうしても、お前さんの助けが必要なのだよ」

何故自分なのかと問おうとして、次に老婆の告げた言葉に、レオアリスの表情が厳しさを増した。

「――劍士が、おるようでの」

瞳にどこか信じ難い色を浮かべ、レオアリスは老婆の顔を見返す。

劍士とは、自らの体の一部、主に腕などを剣に変化させ戦う種族の事だ。劍士たるその由縁の劍は、通常左右いずれかの腕に宿り、劍士一人で百の兵を抑えると言われるほど、高い戦闘能力を持つ。

種としてそれほど数が多くなく、また剣を身に宿すという特性と戦場における風聞のみが聞こえてくる事から、一般的に剣士は殺戮者として恐れられる事が多い。

『殺戮者』 『切り裂く者』 『戦う為だけに存在する種』

その剣士が、野盗の中に？

「どうすべきか思案しておった時、ちようどお前さんが飛ぶのが見えたのだよ」

「——なるほど、渡りに船って訳か」

それで、術を用いてまで、この老婆は自分を呼んだのだ。

レオアリスはまるで何かを期待するような、どこか楽しそうな笑みを浮かべ、老婆の顔を眺めた。老婆が頷いて口を開きかけたとき、ふとレオアリスの漆黒の瞳が鳶の這う天井に向けられる。意識の外を回るような気配と、鳥の音が微かに耳に響く。レオアリスは片手を上げて会話を遮ると椅子から立ち上がった。

「……悪い、一旦出してくれ。カイが戻った」

枝葉の擦れる乾いた音と共にゆっくりと茂みが口を開き、流れ込んできた外気が肌を撫でる。太陽は中天より西側の空に移り始め、正午を二刻ほど過ぎた頃の独特の熱を帯びた陽射しが、緑に包まれた風景を鮮やかに照らし出している。その中に、風を切って銀燐の飛竜が降り立った。

「ハヤテ。悪かったな」

レオアリスの姿を認め、ハヤテは嬉しそうに一声鳴いた。続けて降り立った二騎の飛竜を見て、レオアリスは驚いた顔を上げた。

「お前等が来るとは思わなかったな」

クライフとロットバルトはレオアリスの前に立つと、左腕を胸に当て、一礼した。

「ご無事で何より」

ロットバルトはいつもと変わらないレオアリスの様子を見て取り、蒼い瞳に安堵の色を刷いた。クライフもにや、と笑みを浮かべる。

「ハヤテがカラで帰るモンだから、肝冷やしましたよ。一体何やって落ちたんです？」

「はは」

身体を起し姿勢を整えると、二人はレオアリスを促すようにハヤテの方へ身体を開いた。

「いや、ちよつと待ってくれ。——用が出来た」

そう言いながらレオアリスは背後を振り返った。レオアリスの後ろから歩み出た老婆と子供達の姿に、ロットバルトが微かに眉を上げる。

「その方は？」

「えーつと、……ばあさん名前なんだっけ？ そういや聞いてねえな」

呆れた表情を浮かべたロットバルトに向かって、レオアリスはあっさり笑って手を振ってみせる。

「ま、ほら、あんま重要じゃないだろ？ それより、案件としては一刻を争う」

レオアリスの声に含まれた真剣な響きに、ロットバルトとクライフが顔を見合わせた。

「——どういう事か、ご説明いただけますか」

事情を手早く話し終えたレオアリスに、ロットバルトは冷静な瞳を向ける。

「貴方が関わるべきとは思えませぬね。第三隊の管轄に断り無く手を出せば、後々いらぬ謗りを受けるのは貴方だ。三隊に通告し、速やかに討たせるのが正当な手段でしょう」

「判ってる。けど、相手に剣士がいるなら——やっぱり俺がやるべきだろう」

漆黒の瞳は問い掛けながらも、既に自らのすべき事を決めてしまっているのが判る。懸念を拭いきれないロットバルトとしては、半ば諦め交じりながらも更に問いかけた。

「……その情報は確かですか」

「判らない。なんせガキどもの言う事だしなあ」

あまりにあっさりとレオアリスが答えたので、ロットバルトもクライフも、拍子抜けしたように肩を落とす。

しかし、事実剣士がいるのならば、迂闊に剣を交えれば甚大な損害を被るのは目に見えている。それどころか剣を交える事すらまともにも出来はしない、それが剣士だ。

剣士が野盗の中にいるという情報を三隊は持っているだろうか。

「——貴方は、どうお考えです」

ロットバルトの問いにも、レオアリスただ肩を竦めただけだ。

「さあな。ただ、剣士がいなくても、助けは早い方がいい。そうだろうか？」

「それを仰られると、反論は有りませんね」

ロットバルトがクライフに顔を向けると、クライフがにんまり笑ってみせる。

「俺は全く問題ないね」

クライフは少しぐらい問題があった方が、却って生き生きする性格の持ち主だ。その楽しそうな口調にロットバルトは軽く息を吐いた。

「西方三隊ですか……。あそこの大將は形式主義で、自己の権限を侵害される事を疎む傾向が強い。……まあだから、無難な三隊にいるようですよ」

正規軍は王都に駐留する第一大隊、王都の周辺部を管轄する第二大隊、そして辺境部の第七大隊まで七大隊に組織されている。王都と辺境部は重要性も高く、必然的に大隊を指揮統括する者も、高い武力、知力だけではなく、事態に臨機応変に対応できる柔軟性も求められる。

ロットバルトの呟きにも、レオアリスは悪びれもせず笑みを浮かべた。

「悪いな。三隊にバレた時の言い訳はお前が考えてくれると、実は思ってる」

「……全く……」

そうもさらりと言つてのけられては、否の言いようもない。尤も自分の役割はそこにこそあると、ロットバルト自身そう自覚していた。保守的な結果を諦め、ロットバルトは瞳を上げた。

「仕方ありませんね。貴方の意志が既に決まっているのなら、これ以上時間を無駄にする事もない。行動に移しましょうか。……まずは、情報が必要です」

どうやって、とも聞かずに、レオアリスは再びカイを呼んだ。ロットバルトが言葉を続ける。

「村の状況と家屋等の配置、地形、それから三隊の現在の把握を」

レオアリスが眼を向けると、カイは一声鳴いて姿を消した。

それまで口を閉ざしていた老婆が、三人の前で静かに頭を下げる。

「感謝いたします」

老婆の言葉に漸く状況が飲み込めたのだろう、子供達が顔を輝かせ、きやいきやいと声を上げて彼等の周囲を嬉しそうに飛び跳ね出した。クライフは子供達に向き直り、腰に手を当てた。

「よっしゃ、俺にまかすとけ！ 父ちゃんと母ちゃんはちゃーんと助けてやるぜ！」

「ホント？」

「だから、助けたら葡萄酒をくれるように、一言頼んでくれよな」

「うん！」

「……情けない……」

クライフはカイの戻りを待つ間に子供達の相手をすることにしたのか、纏わりついてくる子供を持ち上げては、次々放り出している。一見乱暴な扱いなのだが、子供達はすっかりそれが気に入ったようだった。

途端にのどかさを取り戻したその光景を眺めながら、レオアリスは呆れた笑みを漏らした。

「喜ぶのはまだ早いなだけだな……。俺も剣士を相手にするのは初めてだし、どうなるか」

「その割には、期待もされているようですね」

ロットバルトの指摘に、レオアリスは確かな笑みを、その頬に浮かべた。それから、ふと遠くを見透かすように瞳を細める。

「悪い、ちよつと身体頼む」

漆黒の瞳から光が薄れ、瞼が閉ざされる。僅かに傾いだ身体を、ロッ

トバルトの延ばした腕が支えた。頭半分程低い位置にあるその顔に視線を落とす。

全ての意識を飛ばした訳ではなく、一部を使い魔の視点に繋いでいる。そうする事によって、レオアリスは遠隔地の出来事であっても、詳細な情報を得る事ができた。

「……ロットバルト！ ちょっとこいつらどうにかしてくれ、体力もたねえ……」

子供達を鈴なりにぶら下げて、クライフが閉口した顔で重そうに足を引きずつてくる。

「子供の相手はおまかせしますよ。精神年齢が近いから、楽しいでしょう」

「てめえなあ……」

立ったまま頭を軽くロットバルトの肩に預け、眼を伏せているレオアリスの姿に気付き、クライフは口元を押さえた。

「お兄ちゃんどうしたの？」

「寝てるのー？」

「お前等の村を見に行ってるんだ。静かにしてようぜ。ほら、座ってる」

「ホント？」

「はい」

「おとうさんたち、元気かなあ」

クライフはすっかり子供達を懐かせたようで、子供達はすぐ大人しくなってレオアリスを囲むように座り、期待の満ちた眼でじっと見上げた。

「——かなり、居心地が悪い……」

ロットバルトがぼそりと呟くのを聞きつけ、クライフはにやりと笑った。

レオアリスはカイの視界に繋いでいた自分の意識を、ゆっくりと引き戻した。閉じていた瞼を開くと、ほんの数瞬視界は霞んだが、すぐに明瞭な焦点を取り戻す。

村の位置、配置、地形、必要な情報は揃った。

手近な小枝を拾い上げ、足元の土の上に村の地形を描き出す。

村はヤンサー丘陵の中心部からやや東寄りに位置し、三方を谷に囲まれている。北に面した残りの一方も幅は広くはなく、細長い道で丘陵と繋がっているといった印象だ。谷はそれ程深くはないが、基本的に道はその北面の一角だけだ。

村はそこそこ広い土地の中に、十軒ばかりの民家が中央に寄り集まるようにして建っている。周辺部には葡萄酒を造る為の作業場らしき建物が数棟あった。

レオアリスは書き出した図面に、幾つかの丸をつけて行く。

「門に二人。ここは中から打ち付けてあるな。東、西、南、それぞれの見張り台に一人ずつ。問題は民家の中だが……見張りに二人立てられないって事は、そう多くもないだろう。それから——」

木の枝が指したのは、西の端にある建物だ。レオアリスはどこか困惑した表情を浮かべた。

「こいつが村人の逃げ込んでる貯蔵庫だ。窓が無いから中の様子が判らないんだが、確かにこいつらの言うとおおり、藁が全体を覆うみたいに巻いている」

藁はまるで、中の村人達を守るように戸口を隠し、今も切られた様子は無かった。レオアリスは、興味深々といった様子で地面に描かれた絵を眺めている子供達に瞳を向けた。

「お前等、何やったんだ？」

「おとうさんやおかあさんたちを守ってるの」

「まだ切れてないでしょ？」

「頑張ったもんねー」

「……………はあ」

ひとまず理解する努力を放棄して、レオアリスは二人の中將に視線を戻した。

「心配なのは、食料ですね。貯蔵庫ならば全く口にするものが無い訳ではないでしょうが、既に三日ともなれば疲労の蓄積も軽くない」

「いやー？ 多分水の代わりに酒飲んでるだろうから、助け出したらぐでんぐでんかもしれないぜえ？」

ちよつと羨ましい、などと一人想像するクライフをまるつきり無視した上で、ロットバルトは貯蔵庫を指差した。

「まずはこの安全確保を。三方の見張りが一人ずつなら、綿密な策を講じる必要もない。一つずつ潰しましょう。門は放っておいても構いません。問題はこれの中に――」

残りの野盗達が何人いて、剣士が、どこにいるのか。

「民家じゃ、炙り出す訳にもいかねえしなあ。ま、一箇所で騒ぎを起しや、すぐ出てきますよ。幸い随分空き地がある。火を焚いても延焼はしないでしょう」

クライフは自分の得意分野である「破城」に近い状況に、にやりと不敵な笑みをみせた。気を付ける必要があるのは、ロットバルトの言葉通り、村人の安全と村への被害を最小限にする事だけだ。

レオアリスは頷くと図面に注いでいた視点を、南西の方角へとずらした。少し離れた所に一本の線を引き、西の街道を描き出す。

「ざっと見たところ、三隊の兵は街道添いに中隊が一個、陣を張ってる位だな」

正規軍の中隊は一隊千名で構成される。当初の規模か左中右の一隊のみを残して他は引き上げたのかは判らないが、馬であれば、二刻かからず到達する距離だ。

「では、深夜に火の手が上がれば、明け方には到着するでしょうね。速やかに制圧し、夜が明ける前に撤収しましょう」

「よっしゃ、せっかくだ、派手に行こうぜ」

「何を聞いていたんです。我々の立場は、もちろん三隊にも、可能な限り野盗達にも知れない方がいい。それから」

少し可笑しそうな色を口元に刷いて、ロットバルトはレオアリスを見つめた。

「副将にご連絡を。心配していらつしやるでしょうからね。まあ戻ってから小言を覚悟して戴く事になるでしょうが、それはまた後の話です」

「呆れて物も言えん。一体何の為にロットバルトまで行かせたと思ってるのだ」

カイの口からレオアリスの伝言が流れ終わると、グランスレイは体格のいい身体を揺らして盛大な溜息をついた。右軍中将ヴィルトールは執務室の壁に寄り掛かり腕を組んだまま、瞳だけを上げて、グランスレイの隣に立つ左軍中将フレイザーと目を合わせる。二人は可笑しそうな表情を堪え、グランスレイに視線を戻した。

フレイザーが美しい翡翠の瞳を、からかうように閃かせる。

「今回は貴男の人選違いと、諦めて戴くしかありませんわ」

「クライフは何にでも首を突っ込む性格だし、ロットバルトはあれで上将に甘いからね。第一、上将ご自身、助けを求められて放っておける性格ではないでしょう」

その事は常に傍らに立つグランスレイ自身が一番良く判っているだろう、と二人は言葉の端々に漂わせている。グランスレイは自分の息子というよりもまだ年の若い上官の顔を思い浮べ、もう一度大きな溜息をついた。

「……戻られたら、しっかり話をさせていただく」

ふとグランスレイは窓の外に視線を注いだ。三日目の月が細い光を王都の夜に掲げている。

野盗の中にいる剣士が、どれほどの相手か……。剣士が野盗に交じているなど、聞いた事は無い。

全くの騙りか、或いは名を秘しているのか。

その事が、グランスレイの意識に警鐘を鳴らしていた。

日中とは打って変わって、冷えた風が体温を奪いながら、連なる丘陵の上を駆け抜けていく。

西側の見張り台の上で、男はぶるっと身体を震わせた。見張り台と言っても名ばかりで、丸太で組んだちよつと高い台程度のものだ。男達が村を襲った時も、誰も見張りになど立っていないかった。第一日が暮れてしまった後は、辺りは見張りなど意味も無いほどの闇の中で、脇に置かれた篝火も、ほんの僅か辺りを照らし出す事しか出来ない。

全く、ここはろくなモンじゃない。

一人ごちて丸太の柵に寄りかかりしやがみ込む。西方軍の包囲を逃れて漸く逃げ込んだのはいいものの、村人が逃げ出した後の家の中には、僅かな食料と酒しか残っていないかった。ヤンサールの葡萄酒でたつぷりと財を蓄えていると期待していたが、古びた家の中にはどれも大した値打ち物もない。それらは全部、あの蕪が巻きついた酒蔵の中にあるのだろう。

「ありや、何なんだ」

男は見張り台のすぐ横にある酒蔵に視線を投げた。村人達が逃げ込んだ直後、男達の目の前であの蕪は建物ごと何重にも扉を巻き込んだのだ。剣だろうが斧だろうが、蕪は全く切れる気配がなかった。

「くそつ、面白くもねえ。いつそ火でも放つちまえばいいんだ」

女なら犯すし、男は殺す。確かガキ共も何人かいた。逃げ惑う子供を追いかけて斬るのは、いい退屈凌ぎになる。こんなしけた村、それぐらいのお楽しみがあってもいい筈だ。

だがそれらが全くない上に、いつ西方軍が来るか気が気ではない。正直、男はさつさとここから移りたかった。

三日前の包囲から運よく逃げられたのはあの男のお陰だが、それまで首領のようにふんぞり返っているのも気に食わない。

「あの野郎、何が剣士だ……」

「その剣士について、教えてもらいましょうか」

ふいかけられた声に、男は咄嗟に腰を浮かした。声のした方を確認する間もなく、空気を切る音と共に、正面に黒い影が降り立つ。反射的に剣の柄に掛けた手が、動きを止めた。

喉元に冷えた刃が当たっている。

白刃は影の手元から伸びていた。抜き放った剣を男の喉元に当てたま、影——ロットバルトは身を起した。口を開き、大声を上げた男を、冷えた声が制する。

「騒いでも構わないが、その前に首を落とす」

首筋に僅かに食い込む冷たい感覚に、男は頷く事も出来ずに、ただ両手を挙げた。

「……さて、ではここに何人いるのか、明確に答えてもらいましょう」

「ふざけ……」

篝火に映し出された顔を眺め、男は啞然と口を開けた。金の髪の間で、蒼い瞳が細められる。氷を思わせる伶俐なその顔を前に、喉元に突きつけられた剣の存在も忘れて、男は問われるままに半ば呆然と口を開いた。

「ぜ、全部で……十五だ」

「位置は」

「見張りに五人立って……、他は、中央の一番でけえ家に、皆いる」

「なるほど。——剣士も、その中に？」

剣士と聞いて、男は漸く我に返った。引き攣った笑いをその顔に浮かべる。

「そうだ、剣士だ。……テメエが何者か知らねえが、剣士相手に何が出来る？」

「同感ですね」

チラリと笑うとロットバルトは手の中で剣を反し、峰で男の首筋を打った。声も無くその場に崩れ落ちる身体に一度視線を落としてから、上空を振り仰ぐ。

「一箇所に固まっているのは、少々面倒ですね」

夜の中に浮かんだ飛竜の上から、クライフが顔を覗かせた。

「飴と鞭だよなあ。下手な拷問より効果あるんじゃないか？」

「何をくだらない事を。さて、私の役割はこの確保です。貴方は東の見張り台まで、剣士の誘導を」

「判ってるって」

鞘走りを利用して抜き打たれるロットバルトの剣は、一瞬にして相手を制する。こういう時に、特に有効だ。そしてクライフはこの次の段階を得意としている。

「んじやま、俺は適当に暴れてきますか」

飛竜の背からひよいと飛び降り、見張り台のすぐ脇の地面に降り立つ。手にした長槍を一度軽く振ると、肩に担ぎ上げた。

レオアリスは東の見張り台の上に立ち、村の中央に寄り集まるように建っている家屋の影を眺めた。南、東の見張り台、そして今ロットバルトが向かった西。ここまでは特に問題はない。クライフもすぐに動くだろう。

鳩尾に右手を当てる。静かに、そこから鼓動が響くのが、当てた右手に感じられる。

（――剣士か）

レオアリスは小さく笑みを刷いた。

「一体いつまでここにいりゃいいんだ?! こんな村、もう捨てて出ようぜ」

床に転がった酒瓶を蹴り上げると、壁に当たって砕け、僅かに残った雫が床を汚した。その場にいる男達は、ある者は同調し、ある者はめんどくさそうな顔つきで、瓶を蹴り上げた若い男を眺める。

期待した収穫は何も無い。三日もこの場所にいる事に、確実に苛立ちが募っている。

「よお、あんたの見込み違いなんじやねえのか? ここなら西方軍をやり過ごせるような事言ったけどよ、ちっとも来る気配はねえし、第一何の

面白みもねえ」

部屋の奥に座っていた、三十代半ば程の痩せぎすの男が顔を上げる。その右腕を覆うように布が掛けられていた。黙ったままの相手に、男は更に声を荒げて詰め寄った。

「大体下手すりゃこんなとこ、逆に袋の鼠だ。西方軍が来ない三日間の内に、もっと逃げときゃ良かったんじやねえのかよ」

「そうだ、丘陵を抜けて北に出りゃ、また街もある。こんなしけたとこじゃなくて、もっとましな獲物が手に入っただろうぜ」

「女もなあ。剣士様は戦い以外興味ねえかもしれないけどよ、俺たちあ犯れねえと涸れちまう」

「違えねえ!」

どつと笑い声がかかる中、男は向けられる視線を睨み返しながら、僅かに腕を覆っている布をずらした。男達が怯えたように口を嚙む。

「俺にそんな口を聞かない方がいいぜ。最初に道を切り開いてやった時の、テメエの態度を思い出すんだな」

「何だとオ?」
苛立つて剣の柄に手を掛けた若い男を、剣士は下から嘲るように眺めた。

「はっ、どうすんだ? 剣士相手によ」

「――」

男は憎々しげに剣士を睨み、しかし何も言えずに背中を向けた。確かに、あの時の窮地を救ったのはこの男だ。剣が容赦なく兵を切り裂く様を、実際目にはしている。

逆らうのは、怖かった。

その後姿を眺めて剣士は喉の奥で笑い、手にした酒瓶を叩いた。ふいに、扉が遠慮ない音で叩かれる。男達は一斉に扉へと視線を向けた。

「誰だ」

見張りの誰かが勝手に戻ったのかと、舌打ちして一人が扉に近づきかけた時だ。

「お届けモンでーす」

場違いな明るい声に、部屋にいた男達が顔を見合わせ、次いで一斉に立ち上がる。

「……てめえ、誰だ!？」

「開けてくれないなら開けちゃうよー」

途端に、鍵の掛かったままの扉が、枠ごと内側に弾け飛んだ。細い丸太を組んだ扉が正面にいた男を薙ぎ倒し、そのまま後方の二人を巻き込んで派手な音を立てて倒れる。

「ありや、強く蹴り過ぎたか? 後で直すのめんどくせえなあ」

クライフは小さく溜息をつきながら室内に踏み込むと、すばやく内部に視線を走らせた。

「一人足りねえ……って、扉の下か。じゃ、情報どおりだな。素直な奴」

まるで場違いなその態度に暫く呆気にと取られていた男達は、我に返ってクライフの正面に詰め寄ると、手にした抜き身の剣を向けた。

「何だあ、貴様は!」

「西方軍か!？」

「違うけど、秘密にしろってよ」

にや、と笑うと、手にした長槍を横薙ぎに一閃する。手前にいた三人が壁に跳ね飛ばされ、一人は窓を破って外に飛び出し、残りの二人は床の上に重なるように崩れ落ちた。

「長物相手に、固まらない方がいいぜ?」

一瞬にして仲間の人数が半数に減ったのを見て、じり、と男達が後退る。クライフは戸口の前から動かず、室内を見回した。

「さて、どいつが剣士だ?」

それまで一番奥に悠然と座っていた男が立ち上がる。男は腕を覆っていた布を床に落とした。

剥き出しの刃が、男の右腕から生えている。

クライフは明るい茶色の瞳を細めた。

「……テメェ、知っててやってんのか? ずいぶん舐めてくれるじゃねえか」

低く嘲るような声と共に剣士が一步足を踏み出すのを見て、クライフは一步退った。その様子に、剣士が自分の優位を確信して笑う。

「おいおい、今更逃げようってのか?」

「当たり前だ。槍一本で剣士を相手にするのは、結構懲りてんだよ。すぐ折られちゃうし?」

「つ、舐めてんのか!」

男が右腕を振り抜いた。床を蹴ったクライフの一瞬後を追う様に亀裂が走り、石造りの壁を砕く。それにちらりと視線を走らせてから長槍の石突で地面を突き、クライフは隣家の屋根に飛び上がった。戸口から男が走り出る。

軽く手を振ると、クライフは身を翻した。レオアリスの待つ、東の見張り台へ。

バラバラと後を追ってくる残りの野盗達はレオアリスの邪魔にならないよう、後で相手にするとして、まずは剣士をレオアリスの元へ導く。

小さい村は、苦も無く相手を引き連れたまま、クライフを目的の場所へと通す。

見張り台の上に立つレオアリスの姿を認めると、クライフはチラリと背後に視線を向け、それから唐突に地面を蹴った。

「上將、後は頼みます!」

空中で身体を捻りながら方向を変え、追ってきた野盗達の、更に背後に降り立つ。レオアリスはそれに小さく笑みを浮かべると、見張り台の前で足を止めた男と、向き合った。

男は顔を上げて、レオアリスの姿を眺める。年若い、そして武器の一つも手にしていないその姿に、あからさまな嘲笑を浮かべた。

「お前が俺とやろうってのか? 俺は剣士だぜ。剣一本持たずに、何しようってんだ?」

レオアリスは暫く男に視線を注いでいたが、やがてつまらなそうにその目を閉じた。

「……お前と、同じはずなんだけどな」

「ああ?!」

レオアリスの言葉に、男が不可解な表情を浮かべる。レオアリスは右手を鳩尾に当てた。

「何も感じないものなのか、それとも——、お前、剣士ってのは単なる騙りか？」

「な、何言ってる……」

青ざめた男の言葉は最後まで発されずに、喉の奥に飲み込まれた。レオアリスの右手の辺り、鳩尾から、青白い光が静かに漏れ出している。右手が、ずぶりと手首の辺りまで鳩尾に埋まる。

光は一際強くなり、レオアリスが右手を引き抜くと共に、細長く形取られていく。

呆然と立ち尽くした男の前で、それはゆっくりと、姿を現した。

青白く、光を纏う——

美しい長剣。

完全に姿を現したそれを、感触を確かめるように一度振ると、レオアリスは右手に提げて男へと一歩踏み出した。

呻き声を漏らし、男が後退る。

目の前に在る者が、何なのか——

「剣……土……」

身体が恐怖に震えるのが判る。

剣士の剣は通常、左右の腕のどちらかに宿る。だがそれ以外にただ一人、十三対目の肋骨に二対の剣を宿す者の名を、男でさえ知っていた。近衛師団第一大隊大将。

最高位と謳われる剣士——、レオアリス。

「——俺は、同じ剣士と剣を合わせた事が無い。だから、少し楽しみだったんだが」

レオアリスから発される、皮膚を叩くような圧迫感。研ぎ澄まされた剣気。

それは、男からは全く感じられなかった。

「術か何かで、後から付けたか」

怒りと羞恥とが、男の眼の中で目まぐるしく入れ替わる。レオアリスの指摘どおり、右腕の剣は、術によって後から付けたものだ。

剣士だと言って、ほんの少し岩でも砕いて見せれば、誰もが疑う事無く自分を恐れて従った。

だが、紛い物とはいえ、それなりの力は備えている。

男は唸り声を上げると、右腕を振り翳して地面を蹴った。

レオアリスの右手が動く。

撃ち合った瞬間、男の剣は音を立てて砕けた。

「！」

生じた剣風が、男の身体を弾く。

悲鳴すら上げる間もなく、男の身体は真つ二つに割れ——

青白い光の中に溶けた。

青白い閃光が北東の夜空を切り裂き、消えた。

「何事だ!？」

雷光のように走って眼の奥に残像を残したそれは、既に影も形もない。宿营地を見回っていた西方軍第三大隊右軍少将は、近くにいた兵士を振り返った。

「中将に報告せよ! 騎馬の準備は可能か？」

「はっ、いつでも動けるよう整えてあります!」

「では、一個小隊を用意させておけ」

慌ただしく駆け出した兵を見送った後、少将は自らも出る準備を整えるために、天幕へと足を向けた。

「火い焚く必要あるかあー？」

クライフが松明を手にしたまま、夜空を眺める。

「剣光が走った。必要無いでしょうね。退けますか？」

「了解よん」

ちようどレオアリスが西の見張り台に向かって歩いてくるのに気付き、二人は左腕を胸に当てる。問い掛ける顔に、レオアリスは笑って首を振った。既にその手に剣は無い。

「残念ながら幸いにか判らないが、剣士じゃなかったな」

「幸いですよ」

「——確かに」

苦笑して頷くと、改めて辺りを見渡す。疎らな草地の上には、野盗達が点々と倒れていた。

「これどうします? 縛って一箇所に置いときますか。あ、ちなみにやったの、全部俺っす。ロットバルトは見てただけで何もしてません」

「酒蔵に近づかない限りは、私の仕事ではありませんので」

澄まして当然のように返すロットバルトの言葉に、クライフはやり場

の無い怒りを地面にぶつけた。レオアリスはそれを眺めて、小さく吹き出す。そのまま口元に右手を当てた。

「縛つとくのも不自然だなあ……どうせ朝まで気付かなさそうだ、ほつとくか。それより早いとこ戻って、あいつ等に伝えてやらなきゃ……」

子供達の心配そうな顔を思い出し、顔を上げた瞬間、視界を駆けて来る幾つもの小さい姿に、レオアリスはぼかと口を開けた。

「——はあ!？」

思わず声が裏返る。いつの間にもここまで来たのか、子供達は嬉しそうにきやいきやいとレオアリス達の周りを取り囲んだ。

「ありがとー!!」

「お兄ちゃんたち、すごいよねー」

「ありがとー」

「……いや、お前等、どっから来たんだ? じゃねえ、何でここに……、ああ? それも違うか?」

レオアリスは混乱したまま、足元に纏わり付く子供達を眺める。

三人が飛竜で老婆の元を立つ時まで、彼等は確かにそこにいたのだ。それから制圧完了まで、半刻と経っていない。子供の足で歩いて来れる距離ではない筈だ。

「だって僕らずっとここにいるんだもん」

「ねー」

得意そうに顔を見合わせて、ころころと笑う。

「ねーって、訳わからねえ……」

「上将」

ロットバルトの声に、レオアリスはその指差した方に視線を向けた。

酒蔵を覆っていた蔦が、微かな音を立てながら、ゆっくりとほどけていく。呆然と見守る中、蔦はやがて完全にほどけ、地面の下に潜り込むように姿を消した。

「——」

「疲れたねー」

「頑張ったもんねー」

「もう寝よう」

「寝よー」

振り返ったレオアリス達の前で、子供達の姿が次々と薄れ、消えていく。一番年長の少年が、にっこりと笑った。

「兄ちゃん達、皆を助けてくれて、ありがとな」

返す言葉を思いつかない内に、その姿も溶けるように消えた。

「……えーっと……」

呆然としたままのレオアリスとクライフを余所に、ロットバルトは酒蔵に歩み寄ると、扉を開いた。幾つかの悲鳴が上がり、漸く我に返って、レオアリスも扉に近寄る。

覗き込むと、中にいた村人達が、疲れ切った顔を恐る恐る上げた。

「怪我をしている方はいますか？」

ロットバルトの向けた穏やかな声と、三人の身を包む黒い軍服に、野盗では無いことに気付いたのだろう、村人達の顔に安堵の色が広がる。

扉の奥に男ばかり十人ほど、そして地下への階段から、女性達と子供達がやはり十人ばかり姿を見せた。母親らしき女性が、腕の中の我が子を抱きしめ、溜息にも似た声を上げる。壮年の男がその肩を抱きながら、顔を上げた。

「怪我人はいない。皆無事に逃げ込めたから——。あいつ等が、何で入ってこなかったのか、判らんが」

それでは村人達は、ここを薦が覆っていた事に、まるで気付いていなかったらしい。

「あなた方は？ 西方軍の？」

「いや……ただ、この村の子供達に頼まれて……」

レオアリスの言葉に、村人達は不思議そうに顔を見合わせた。

「子供？」

「小さいのが、九人ぐらい」

眩くように答えたが、村の男が口を開く前に、その答えは既に判っていた。

何せ、自分達の目の前で、溶けるように姿を消したのだ。

「この村の子供達は、ここにいる子等で全部です」

飛竜から降り立つと、老婆はすでにそこで待っていて、レオアリス達の姿を眺め、深い皺に笑みを刻んだ。曲った腰を更に折るようにして、頭を下げる。

「子供等が、喜んでおったよ」

「あいつらは、何だったんだ？」

「あの子達は、あの村の葡萄の若木での。いつも丁寧な心を傾けて世話をしてくれる村人達を、大層好いておる」

「……葡萄……？」

眉を顰めて老婆の顔を見返したものの、子供達のころと似通った姿を思い出し、レオアリスは思わず吹き出した。

房に連なった葡萄の粒が子供の形を取ったら、確かにあんな感じになるかもしれない。

「そりやまた、頑張ったもんだ」

鳶を這わせて家を覆い、子供の姿を取って助けを呼びに行く。中々どうして、下手な剣士などより、ずっと役に立つではないか？

「子供等から、お礼が届いておるよ。ほら」

老婆が指差した先の草の上に、幾つかの葡萄の房と、口を皮で覆った甕が一つ、置かれていた。

クライフが甕の蓋を持ち上げて覗き込み、嬉しそうな声を上げる。

「こりや、ヤンサールの葡萄酒じゃねえか。すっげえ上物っすよ」

少し生意気そうなどころのある彼等の姿をもう一度思い返して、レオアリスは口元を緩めた。酒は残念ながら飲めないが、葡萄の房を付けるあたり、気が利くのか小生意気なのか。

「……有難くいただきたいとこう。——あんたは」

眼を向けた時、既にそこに老婆の姿は無かった。さわりと柔らかく枝葉が擦れる音に眼を上げると、年経た古い大樹が、白み始めた空を背負い、風にゆっくりと身を揺らしていた。

朝の太陽は既に東の空の半ばまで昇り、王都に鮮やかな光と長い影を投じている。太陽は王城の高い尖塔に半分ほど掛かり、光の冠を作り上げていた。

「眩し……」

ちょうど東に向かって飛竜を飛ばしている為、日差しは一直線に眼中に飛び込んでくる。

目をしばたかせながら、そう言えば一睡もしていなかったと、今更ながらに思い返す。朝の執務時間までにはまだ二刻ほど余裕がある。屋敷に戻るのは時間が勿体ない、取り敢えず執務室で寝ようと、そう思った。

「ま、でも結構爽やかなもんだな」

「そうっすねー」

朝の天気はひんやりと澄み、心地良い。クライフも頷いたが、ロットバルトは意味ありげに笑っただけだ。

「？」

何かあるのかと問い返す間もなく、王都の街並みが通り過ぎ、王城の第一層、近衛師団第一大隊の士官棟が見えてくる。

どこかほっとしながら、レオアリスは中庭に向かってハヤテを降下させ、その背を降りて——思わずぎよっと身を引いた。

士官棟の内側をめぐる回廊の前の、その中庭の。

中央に置かれた噴水の前に、フランスレイが腕を組み、どん、と立っている。

「うわあ……」

おじ気付いたレオアリスを余所に、ロットバルトはくすりと笑った。

「これはこれは、まるで朝帰りの娘を一睡もしないで待つ、父親のようですねえ」

「何だ、その現実感溢れる例えは……！ お前いつもそんな事やってんのか？ ……じゃなくって、頼む、ちよっと口添えしてくれ」

「私は、相手の家庭内には関わらない主義ですのぞ」

「はあ!？」

さらりと笑うロットバルトの横顔を、レオアリスは思わずまじまじと見つめた。

「――最低じゃないか? それは」

いや、違ふ、今はそんな話ではない。

そんな事を考えている間にも、ロットバルトはさっさとグランスレイの前まで行くと「任務完了致しました。」などと平然と言つてのけ、そのまま執務室に姿を消した。

(ずりい……)

グランスレイの青筋の立つていそうな顔は、その間もじつとレオアリスに向けられている。

「――クライフ」

レオアリスの継るような声に、クライフは非常に残念そうながらも、手にしていた甕を持ち上げた。

「分かりました! 涙を飲んで、こいつを副将に献上しましょう!」

「いやつ、そうじゃなく……」

グランスレイの青筋がピシリと音を立てた。

「――このつ、大馬鹿者が――っ!!!」

大音声が中庭に響き渡り、窓硝子がビリビリと震える。

「うああっ」

二人は思わず後退り、首を縮めた。

「クライフ! 貴様は戻つて午前中までに始末書を提出しろ!」

「ひえ」

「ちよつと待て、今回の件は……」

言いかけて、グランスレイの厳しい眼にじろりと睨まれ、レオアリスは語尾をもごもご口の中に閉まつた。

「――上将。ここに立ちなさい」

「は……」

おずおずとグランスレイの前に立つたレオアリスを、薄い緑の瞳が見

据える。

「貴方は一体、ご自分のお立場と言うものが解つておられるのか!」

「――ハイ」

「声が小さい!」

「重々、承知してます!」

「暫くは、飛竜での外出は控えていただく。無論、異存はありませんな」

「ハイ……」

レオアリスは殊勝に頭を垂れているが、どうせ十日も保たないだろうと、グランスレイは小さく溜息をついた。

何と言つても周りが甘い。部下に慕われるのは隊内を統括する上で不可欠だが、規律を重んじ自ら実践する事も、上に立つ者としての欠かざるべき心構えだ。

そこをこの若い大将には、しっかりと自覚してもらふ必要がある。

「悪かつた。今後気を付ける」

「……ご理解頂ければよろしい。どうぞ」

執務室を手で示すと、レオアリスは安堵の息を吐き、扉に向かって歩き出した。

「上将」

後から声をかけるとレオアリスが慌てて振り返る。その様子にグランスレイは僅かに苦笑を洩らした。

「今回貴方が選択された事に、特に異論はありません」

レオアリスが傍目にも分かるほど、ほつと肩を下ろす。

「……………甘い」

クライフは甕を抱えたままにやりと、ロットバルトは執務室の窓に寄りかかったまま、同時に呟いた。